

“過疎”とは

38期生

I テーマ設定の理由

現在、日本の抱えている大きな社会問題の一つに“過疎”というものがある。どういう経緯でこのようになったのか、また現状はどうなのか、といった疑問を解決する為にこの自由研究をすることにした。それから、この問題の対策についても追究していきたい。

II 研究方法

この研究は予備調査と実地調査に分けて研究していく。

<I. 予備調査>

§ 1. 調査地決定（複数）

§ 2. 調査内容

- a. 位置、面積とその用途
- b. 人口
- c. 沿革
- d. 産業

<II. 実地調査>

§ 1. 調査地決定（過疎地で複数）

§ 2. 実地調査

III 研究内容

<I. 予備調査>

§ 1. 調査地決定

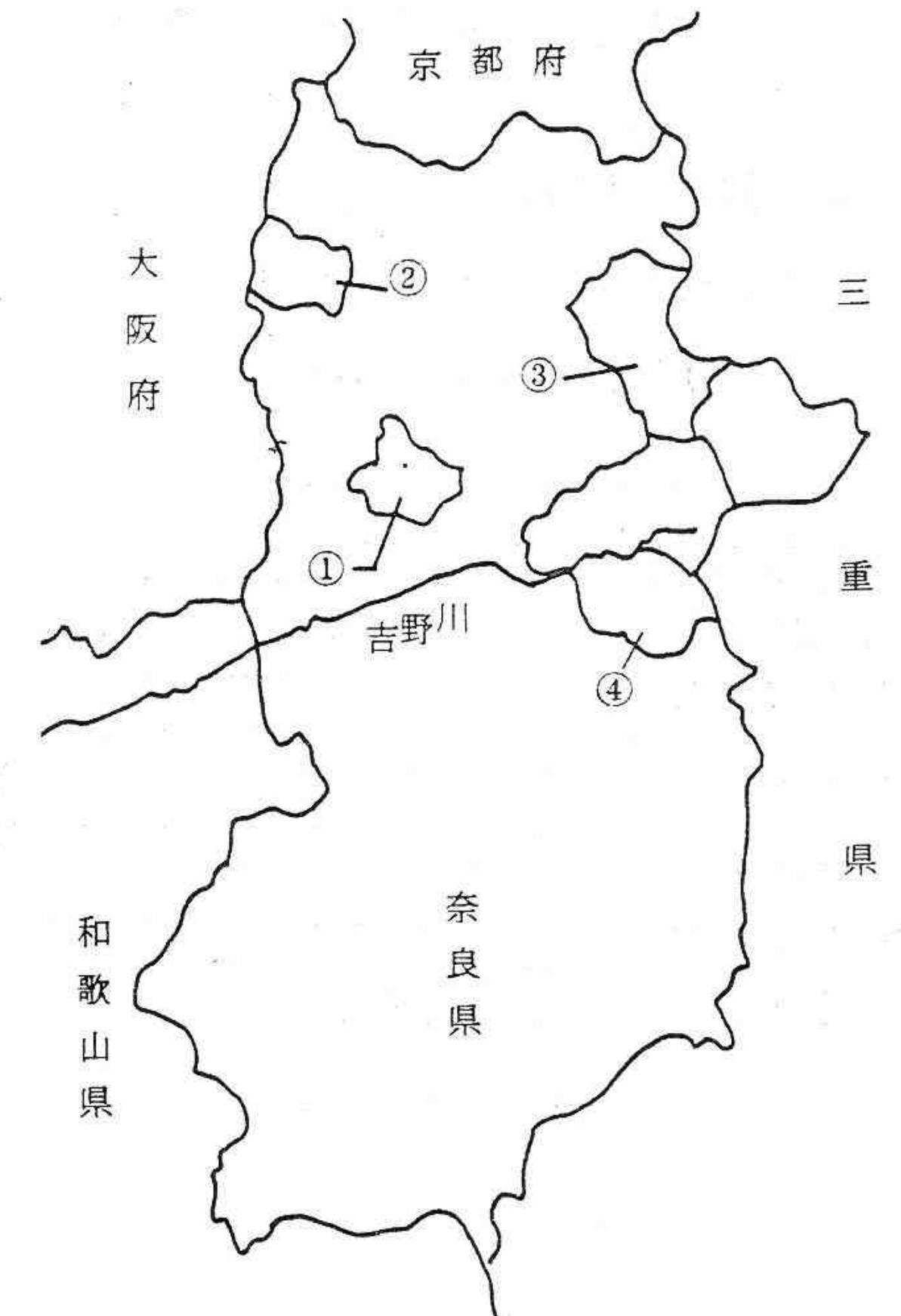
明日香村、平群町、室生村、東吉野村

※ 明日香村、平群町は非過疎地
(いずれも奈良県に所在)

§ 2. 調査内容

〔a 位置・面積とその用途〕

- ① 明日香村—— 奈良県の中央部より少し北の所に位置する。
- ② 平群町—— 奈良県の北西部に位置し、生駒市と隣接する。
- ③ 室生村—— 奈良県の北東部にあり、三重県と隣接する。
- ④ 東吉野村—— 奈良県の東部にあり、室生村・三重県と隣接する。



▲図1 各村の位置

〔b 人口〕

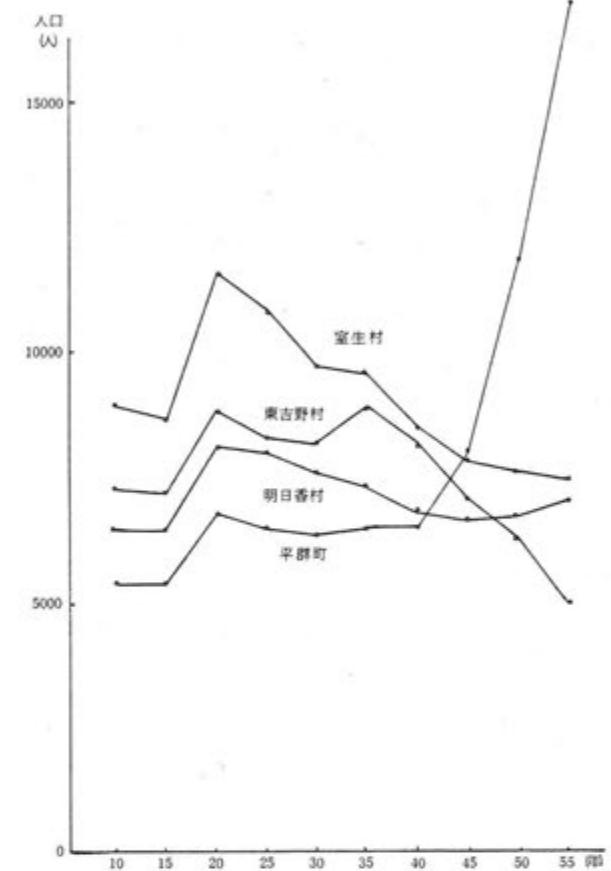
—共通点—

どの村も昭和15年から20年にかけて人口が増えているが、これは太平洋戦争で大阪の方やその他の都市から人々が疎開してきたためだと思われる。

室生村と東吉野村は昭和30～35年辺りから人口が減少してきている。これは“過疎”の現象である。室生村はまだ減り方がゆるいが東吉野村は急降下しているのがわかる。

—相違点—

室生村、東吉野村、いわゆる現在、過疎地であるこの2つの村の人口が昭和30年～35年の辺りから減少してきているのに対し、現在、非過疎地である平群町の人口は増えている。(しかし、明日香村は減少してきている。)



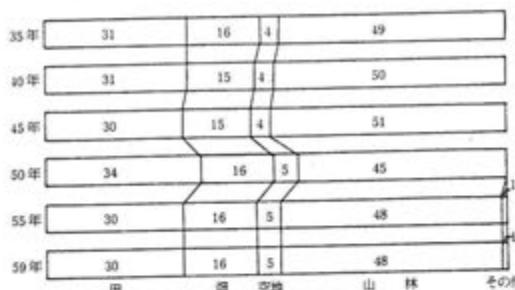
▲図3 各村の人口の移りかわり

〔c 沿革〕

- S. 30. 2. 11 東里村(山辺郡)、三本松村、室生村(宇陀郡)の3村を合併し、室生村とする。
- S. 31. 7. 3 阪合村、高市村、明鳥村(いずれも高市郡)の3村を合併し、明日香村とする。
- S. 33. 3. 1 小川村、四郷村、高見村(いずれも吉野郡)の3村を合併し、東吉野村とする。
- S. 46. 2. 1 平群村を平群町とする。
- S. 47 高松塚古墳発見(明日香村)
近畿日本鉄道開通(室生村)

—① 明日香村 —

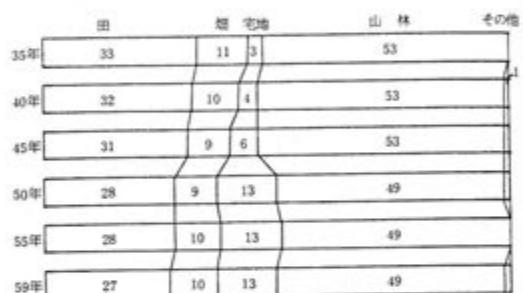
このグラフを見て言えることは、村の約半分は山林で、その他の地域のほとんどは田や畑であるということだ。しかも年々微妙に変化はしているが、その割合はほとんど変化していない。



▲図2 民有地の用途別割合 ① (%)

—② 平群町 —

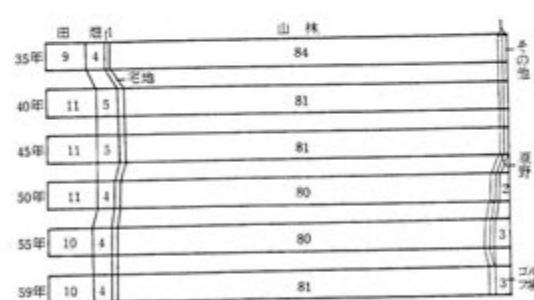
明日香村の場合とよく似ている。約半分は山林で、その他の地域のほとんどは田や畑だが、宅地の割合が明日香村に比べて大きい。しかも、宅地の割合は増加してきている。これは平群町の位置が京阪神の中心都市(大阪)に比較的近いからだろう。



▲図2 民有地の用途別割合 ② (%)

—③ 室生村 —

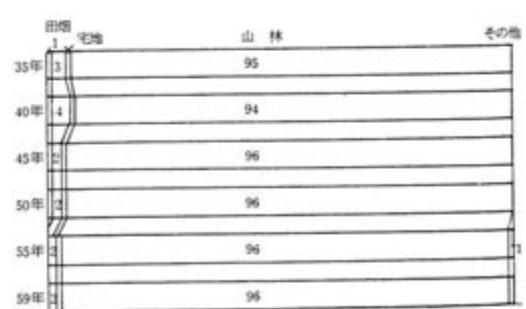
見てのとおり、村の全面積のほとんどは山林と田、畑だけである。宅地が1%というのが何ともいえない。



▲図2 民有地の用途別割合 ③ (%)

—④ 東吉野村 —

この村は山林しかないのか、と言いたくなるようなグラフだが、村のはほとんどが山地なので仕方ないだろう。

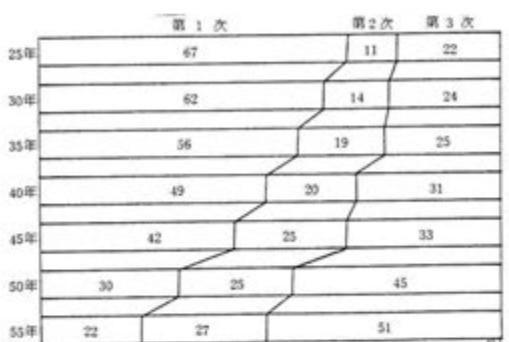


▲図2 民有地の用途別割合 ④ (%)

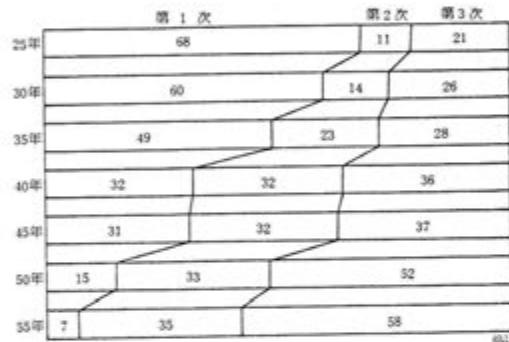
〔d 産業〕

—① 明日香村—

年々、第1次産業の構成比が低くなっているが第2次産業は、少しずつではあるが増えてきている。第3次産業も年々増加しており、昭和55年では半分を占めている。



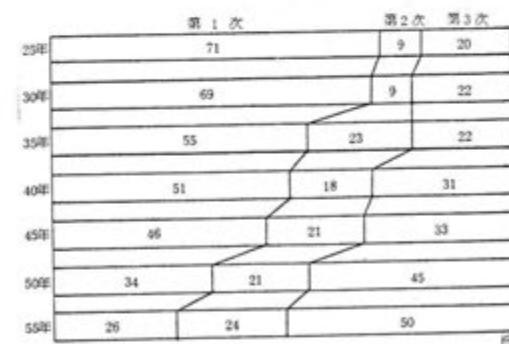
▲図4 産業別就業人口の構成比 ①



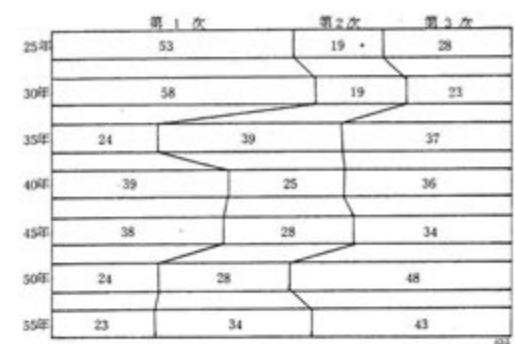
▲図4 産業別就業人口の構成比 ②

—③ 室生村—

第1次産業就業人口の構成比は年々低下しているが、まだ昭和55年で26%と、全体の約 $\frac{1}{4}$ を占めている。第3次産業は確実に増えてきているが、まだ50%である。第2次産業も着実に増えてきているが、第1次産業の割合よりも低い。



▲図4 産業別就業人口の構成比 ③



▲図4 産業別就業人口の構成比 ④

—④ 東吉野村—

一言でいうと、少し不安定である。第1次産業は一時、増加しかけたが減少してきている。しかし、第3次産業人口の割合がかなり不安定なので、この先どうなるか少しわからぬ。

<II. 実地調査>

§ 1. 調査地決定

室生村、東吉野村(奈良県)

§ 2. 実地調査

—室生村—

村の中央部に近鉄大阪線が通り、大阪からは約1時間半ほどかかる所にある。村内には近鉄の駅が2つあり、駅からは近辺に向けてバスが出ている。

集落や家はほとんどが鉄道の線路沿いか、国道沿いにある。山中には家はほとんどないと思われる。

僕は鶴橋から室生口大野駅に行きそこから歩いて調査したが、村全体を調べることはできないので地図Aの太線の部分を歩き、周辺の様子を調べた。人家は川沿いに発達しているが、平地が少ないために山の方の台地にもあった。所々に畠や田があるものの、どれも小さいものであった。それに民宿を営んだりしているところもあった。(副収入にしているのでは……。) こんな寂しい所だが、近鉄が通るようになってから駅を中心に集落が発達していったようなので、近鉄線の開発はこの地域にとって重要な意味をもっている。



▲図5 室生口大野駅周辺の様子



▲地図A 室生村(一部)



▲図6 室生ダム(一部)

人々の交通手段の主流はどうも、
バイクのようである。バスが駅か
ら出ているといっても、停車する
所は主な所だけなので、バイクは
必需品のようだ。

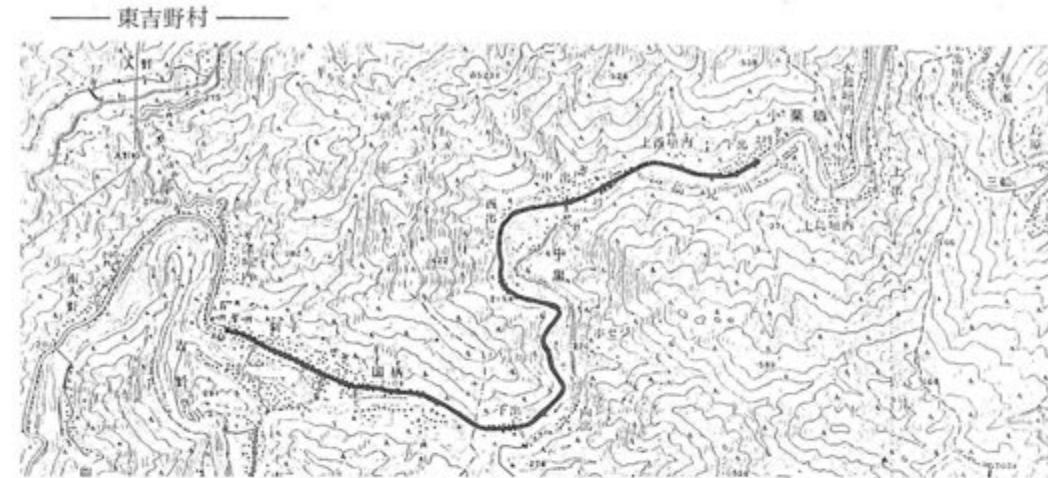
<室生村の公共施設>

学校 7

病院 1

郵便局 6

※地図で探しただけなのでもっと小さい
ものがあるかもしれない。



▲地図B 東吉野村(一部)

村には鉄道が通っていないが近辺の駅からバスが出ているので、それで村内に来れる。大変交通の不便な所だがガスがとおっているだけ他の所よりはましだろう。この辺りには吉野川の支源流、高見川が流れている道路は川沿いに延びている。そしてその道路の周辺に集落が発達しているのだ。山林の木のほとんどは吉野杉である。(日本の3大人工美林の一つ)、ゆえに主な産業は木材に関連した工業である。だが、たばこや自動販売機を置く売店は少なくなく、副収入源にしているようだ。しかし、バスしか通っていないというのが響いているせいか、人の往来はそんなになく何となく静けさの漂う町だった。もっと交通が不便な所は一体どうなっているのだろうか?



▲図7 道路周辺の様子



▲図8 山林の様子

IV 結論

この過疎地にはいろいろな問題があった。交通の便が悪いことや、人の住みにくい地形などがあった。この問題を解決する原点となるのはその地域の人々による「村おこし」というものだろう。その地域の人々がそうした意志を持たない限り、あらゆる手段を投じても無駄ではないだろうか。

過疎対策としてはまず、地形から考えていかねばならない。山を切り崩して平地にし、いろんな面に活用する。例えば、宅地や工業用地、その他いろいろ……。人間は平地で活動するのだから、その場所を確保しなければならない。そうすれば人も集まって同時に交通の便も良くなっていき、町も大きくなっていくだろう。（しかし大変難しい）

それから先にも述べたように「村おこし」も大切だ。最近では過疎対策にコンサルタントを雇う村もあるようだが村全体が一致団結して自分たちの生活を守り、そして発展させていかなければならないと思う。自分たちの“村”がそういう問題に面しているのだから。

V 総括

なんとか、結論は出たがその結論にもいろいろな面で問題がある。山地を切り崩して平地にし……と結論で述べたが木材加工を主な産業としている人々にとって、それは一筋縄ではいかない。国が補助金を出して、それらの人々の生活を守ってあげればいいが国の予算も苦しいからそううまくはいかないだろう。また、平地が確保できたとしても企業を誘致せねばならないし、その企業と村民、役所、国がうまくまとまなければ開発はすすまないだろう。

自分としては今回、わりとがんばれたと思う。しかし、現地で土地の人や役所の人いろいろな事を聞けなかったことと最後に慌ててしまったことが心残りだ。それから結論ももっと深く追究できたと思うが今回の反省を生かして来年度もがんばりたい。

VI 参考文献

過疎対策の現況 国土庁地方振興局過疎対策室 監修